

氏名(本籍)	かわ 川	ぐち 口	ひろし 洋	(兵庫県)
学位の種類	博士(文学)			
学位記番号	博乙第957号			
学位授与年月日	平成6年3月25日			
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当			
審査研究科	歴史・人類学研究科			
学位論文題目	18・19世紀における会津・南山御蔵入領の人口変動とその地域的特徴			
主査	筑波大学教授	文学博士	田中圭一	
副査	筑波大学教授	文学博士	大濱徹也	
副査	筑波大学教授	理学博士	石井英也	
副査	筑波大学助教授	博士(文学)	高桑守	
副査	筑波大学教授		中山和彦	

論文の要旨

本論文は、会津・南山御蔵入領を事例として、18・19世紀における人口変動を明らかにし、その構造を地域社会における消費・生産・人口政策、および地域間交渉という四つの側面から考察したものである。序論、結論を含めて7章28節からなる本研究の特色は、その実態が必ずしも明確に把握されていない18・19世紀の人口動態を性格に復原し、とくに19世紀以降、この地域で見られた緩やかな人口増加を明治期以降の経済成長に連なる「助走」として捉え、それを民衆の生活や村の産業などと関連させながら検討し、従来の通説を再考しようとした点にある。

第1章「序論」では、まず、人口研究が現象の復原を目的としていた初期的段階をへて、今や人口現象を総合的に、しかも地域に生きた人々の活動や地域社会の実態に照らして考察する研究方法を模索する段階であると研究史を位置づけている。新たにとるべき研究方法は、地理学の分野で発達した地域を統合的に記述する研究方法に、近代移行期を相対的に捉える視点を加えることが有効であると主張し、それがひいては江戸時代後期の民衆観を再検討することになり、さらに会津・南山御蔵入領の地域像を提示することにも通じるという著者の研究の立場が述べられている。

第2章「人口変動」は、「宗門改人別家別帳」を史料として、南山御蔵入領の18・19世紀における人口動態を復原している。その結果、村や組ごとに相違が見られるが、南山御蔵入領全体で見れば、人口は18世紀初頭を頂点として減少を続け、天明期から天保期(1780～1840年代)までの期間に最低を記録した後、持続的成長が始まること、人口成長に先行して、18世紀中頃から平均世帯規模の拡大や性比の改善が開始したこと、人口成長は幕末移行本格化するが、江戸時代後期の人口増加は出生数

の増加に伴う自然増加であったことを明らかにしている。また、18世紀初頭に始まる人口減少の一つの理由は、「子返し」という性別選択的な出生制限が行われていたがため、その基底には商品生産の拡大に先行する消費・支出の増大があったことを示唆している。

第3章「消費の動向」では、18世紀中期以降の消費の拡大を、在方商人の増加、日常生活物資の移入量の増大、道路の改修工事、寺社・民家の建設、馬頭碑等の造立活動などから検証している。第4章は、とくに大麻・麻織物の生産、馬産、会津芽手を取り上げ、19世紀に入ってから急激で多様な商品生産の展開を検討している。これらの生産活動の発展とそれに裏付けられた消費行動の活性化こそが労働力需要を高め、19世紀後期以降の本格的な持続的人口成長の原因になったことを明らかにしている。

第5章「移住者の引き入れ」では、移住者引き入れの立案・実施過程を子細に検討している。移住者引き入れは、飢饉による欠損家族の救済を目的として、19世紀初頭から実施された会津藩の人口増加政策によると位置づけられてきた従来の見解に対し、労働力需要の増大を背景として、とくに女性労働力の確保を望んだ民衆の意思から発現した運動であったことを明らかにしている。また、南山御蔵入領では、物資の流通であれ、婚姻関係であれ、越後との結び付きが顕著であるが、有力な引き入れ役人の一人は、江戸時代以前の山内家の家来であり、越後国蒲原郡に住む旧山内家家来との関係を利用して他邦者を引き入れていたことを指摘している。この指摘は、地域とは常に過去を背負いながらその特徴を形成するという事実を示す一つの例証でもある。

第6章「遠隔地からの入婚者の増加」では、遠隔地から南山御蔵入領への婚姻移動が天保期以降に急激に増加する事実を明らかにし、入婚者の出身地の検討を通してその意味を考察した。その結果、婚姻移動は労働力需要、労働移動、日常消費物資の移入や特産物の移出といった地域間交渉と密接に関わっていることを解明した。山地環境が卓越する南山御蔵入領は、自然環境的に異質な、水田単作地帯の越後国との結び付きがとりわけ強く、越後と江戸ないし北関東畑作地帯の中間に位置する回廊地帯的性格をもつことを明らかにしている。

第7章「結論」では、既に述べた人口動態の特徴と南山御蔵入領の地域的条件との関係を整理するとともに、この地域で実証された事実の一般化について論及している。会津藩預かり支配と幕府直支配を繰り返してきた南山御蔵入領は、明治以降に連なる経済成長への助走が他地域に較べやや遅れたとはいえ、おおよそ北関東から東北地方の諸藩に共通する性格を有し、東日本の全体像をうかがえると位置づけて総括している。

審 査 の 要 旨

この論文はまず、今まで史料の関係から十分に解明されたとはいいがたい、江戸時代後期の人口変動を、人口史料の宝庫といわれる会津・南山御蔵入領を事例として、宗門改人別家別帳などの詳細な史料の分析を積み重ねて、性格に復原したことに大きな意味がある。その結果、一般に封建体制のもとで、飢饉の多発や経済力の低さなどから人口が減少・停滞していたと考えられてきた東北地方の

会津、南山御蔵入領でも、19世紀以降自然増加による緩やかな人口増加が始まり、しかもその増加は、人々の消費や生産活動の活性化と密接に関係していたことを解明した。

旧来、地理学分野ではどんな現象を扱っても、事実記載中心という傾向があったことは否めないが、この論文は、人口動態を地域の全体構造との関連から解析するとともに、江戸時代後期の民衆生活に関わらせて検討することで、会津、南山御蔵入領の地域像を提示したいという意欲的作品である。

その考察においては、歴史地理学のあらゆる研究方法を駆使することに努めている。膨大な人口史料を丹念に発掘・分析したばかりでなく、民衆の生活や地域に関する、絵図を含む文書史料を徹底的に検索・活用し、史料の読解にあたってはフィールドワークと野外調査を丹念に試みている。そのことは、「子返し」や「他邦者引き入れ政策」などの解釈に見られるように、通説を覆す、新知見を提起することを可能にした。

しかし、本論文には、視点の拡散による若干の問題も残されている。とくに19世紀以降の人口増加に関しての鮮やかな説明に対して、18世紀初頭に始まる人口減少の理由が迫力を欠く点や、商品生産の発展に伴って女性労働力が何故に必要となるかといった事実関係の提示が不十分なことである。また、個々の部分では新知見を多く加えることができたにもかかわらず、それらに基づく全体像の提示がややものたりない、会津・南山御蔵入領は、その支配形態や関係位置や自然環境それぞれの点で特徴ある個性を有する。会津で見られた人口変動と地域的条件との関係は、北関東から東北地方諸藩に共通するという著者の見解は、基本的に認められるとしても、説得的な議論に欠けるうらみが残る。この点は、より多くの調査経験を積む年齢が必要なだけに、本論のような緻密で実証的な事例調査の蓄積が望まれるところである。

以上のような問題点があるとはいえ、この研究は、従来の人口史ないし歴史地理学研究の通説を改めるいくつかの新知見を、緻密な実証に基づく研究によって提出するとともに、地域生活史のなかに位置づけようとした意欲的労作であり、その成果は高く評価出来る。

よって著者は博士（文学）の学位をうけるに十分な資格を有するものと認める。